

ごあいさつ

本日はご来場くださり、誠にありがとうございます。朗読する者も聞く者も、共に楽しむ、というのがこのひとときの大きな目的です。その中で心に響く作品に出会っていたら最高の喜びです。

前回の第六回は谷川俊太郎特集を組み、この中ホールで公演しました。そして松江で開催された「しまね文芸フェスタ」では実際に谷川さんと対談、劇研「空」六人が六百人近いお客様の前で朗読しました。貴重な経験でした。

今回は日本の名作や古典のすばらしさを味わってください。またこの郷土にもすばらしい作品があることを知っていただきたく詩人特集としました。「郷土の歴史や文化の掘り起こしと再創造」は劇研「空」の目標の一つです。単なる朗読ではなく、映像や音を使い作品を舞台化する工夫をしました。朗読劇もその試みの一つです。どうぞお楽しみください。(劇研「空」代表 洲浜昌三)

第一部 日本の古典・名作

一、「トロッコ」 芥川龍之介 作 朗読 高橋美也子

和上豊子

伊藤寿美

芥川龍之介には有名な短編が数編あります。「羅生門」「蜘蛛の糸」「杜子春」「藪の中」など。「トロッコ」は大正十一年(1922)に書かれた芥川中期の作品です。現在では使用されない言葉もありますが、原文をそのまま朗読します。教科書で読まれた人も多いことでしょう。今回、高橋さん、和上さん、伊藤さんをお願いして朗読していただくことになりました。じっくり味わってください。

二、「永訣の朝」

宮沢賢治

朗読

堤 浩隆

田中和子

三、「雨ニモマケズ」 宮沢賢治

朗読

松本領太

山本和之

四、「星めぐりの歌」 宮沢賢治 作詩作曲

(合唱を聞いてください)

あかいめだまの さそり
ひろげた鷲の つばさ
あをいめだまの 小さいぬ、
ひかりのへびの とぐろ。
オリオンは高く うたひ
つゆとしもとを おとす、
アンドロメダの くもは
さかなのくちの かたち。

宮沢賢治(1896～1933)は童話作家、詩人として有名です。

童話では「風の又三郎」「銀河鉄道の夜」などよく知られています。詩集は「春と修羅」だけです。「永訣の朝」は妹のトシの臨終を書いていきます。「あめゆじゅうとてきてけんじや」「雨雪取って来て賢治や」「雨雪はほほ曇に近い」東北方言のリフレインが印象的です。二人で朗読します。「雨ニモマケズ」は死後発見。手帳に書かれたメモに近いものでした。ちよつと変わった朗読の仕方ですが、二人で朗読します。賢治の童話はいつかやりたいものです。

第二部 郷土の詩人の詩集より

一、別所真紀子詩集より

- 「石見」 朗読 田中和子
「海へ行く道」 朗読 吉川礼子
「青葉木兎」 朗読 若狭雅子

別所さんはこの春『江戸おんな歳時記』で第六十七回読売文学賞を受賞されました。大田市富山町の出身ですが、ほとんどの人が知りません。今回取り上げたのは少しでも多くの市民に知って欲しいからです。詩集は四冊、童話冊、小説やエッセイ、評論はたくさんあります。江戸時代の俳諧に関しては第一人者です。1936年生まれで、旧姓は細貝、旧家でしたが今はありません。今は東京の小平市にお住まいです。今回は故郷に関係深い詩三編を朗読します。詩集『アケボノ象は雪を見たか』『しなやかな日常』『ねむりの形』『すばらしい雨』

二、小林俊二詩集より

- 「木造の図書館」 朗読 竹下ちとせ
「心に揺れる記憶がある」 朗読 和上豊子

小林さんは1929年大田市生まれ、現在は仁摩にお住まいです。国学院大学卒、都立大大学院修了。郷土史家として多著作がありますが、詩集も二冊あります。今回は同じ仁摩にお住まいの竹下さん、和上さんに朗読をお願いしました。

三、高橋留理子詩集『たまどめ』より

- 「たまどめ」 朗読 伊藤寿美
「扶余紀行・女人哀歌」 朗読 吉川礼子
田中和子
若狭礼子
※「聖衣ケンちゃんのこと」 朗読 高橋留理子

詩集『たまどめ』は今春「コールサク社」から出版されました。身辺のことや歴史、社会、戦争、民族などの問題などが物語性と豊かな感性で書かれています。本人の朗読も聞けるかもしれません。お楽しみに。

第三部

創作民話 朗読劇

「出口がない家」

作・洲浜昌三

- | | | | |
|------|------|------|--------|
| 朗読 | 田中和子 | 音楽 | 吉川礼子 |
| 与平 | 松本領太 | 原画 | 松本日菜子 |
| 千代 | 吉川礼子 | 投影操作 | 洲浜昌三 |
| 弥吉 | 山本和之 | 映像作成 | 松本領太 |
| 旅芸人夫 | 堤浩隆 | 照明 | 会館スタッフ |
| 旅芸人妻 | 若狭雅子 | | |

出口がない家？そんなのある？あるんです。おしまいまで話しを聞いてみてください。仁摩で伝わっていた昔話や他の話を参考に書いた創作朗読劇です。面白おかしくちよっぴり悲しい創作民話、（それはお客様が判断すること）のはずです。